

ヒリュウ台「白川」の初着果時の適正着果量とマルチの効果

ヒリュウ台「白川」では、初着果時の着果程度は樹冠容積 m^3 当たり30果程度とし、上部を無着果とすることで次年度の着果量も確保できる。また、収穫前2ヶ月程度のマルチ被覆で品質の向上が図られる。

農業研究センター 果樹研究所 常緑果樹研究室 (担当者: 榊 英雄)

研究のねらい

ヒリュウ台「白川」は、カラタチ台に比べ新梢が短くなり樹形が小型化し、果実品質も向上することを既に報告している。ただ、着果過多で樹冠拡大が抑えられ樹勢が衰弱したり、収穫前の降雨により品質が低下することが予想される。

そこで、安定生産のための適正な着果量と品質安定のためのマルチ処理について明らかにする。

研究の成果

1. 初着果時に着果量が多いほど翌年の着果量は少なく、樹冠容積 m^3 当たり40果以上の着果で翌年の着果は10果以下となり隔年結果が大きくなる(図1)。
2. 樹冠上部を摘蕾し無着果とする着果方法で、全面着果に比べ次年度の着花・果が確保できる(表1)。
3. 9月下旬からの樹冠下マルチ被覆で、糖度が0.7程度上昇し、クエン酸は露地と同程度で品質の向上が図られる(表2)。
4. 以上の結果より、ヒリュウ台「白川」では、初着果時の着果程度は樹冠容積 m^3 当たり30果程度とし、上部を無着果とすることで、次年度の着果量も確保できる。また、収穫前2ヶ月程度のマルチ被覆で品質の向上が図られる。

普及上の留意点

1. カラタチ台よりやや少なめの着果量とするが、大玉果になりやすいので群状着果させる。
2. ヒリュウ台温州ミカンは、水分ストレスを受けやすいのでマルチ被覆により過乾燥になり酸高になる恐れのある場合は、早めにかん水を実施する。

[具体的データ]

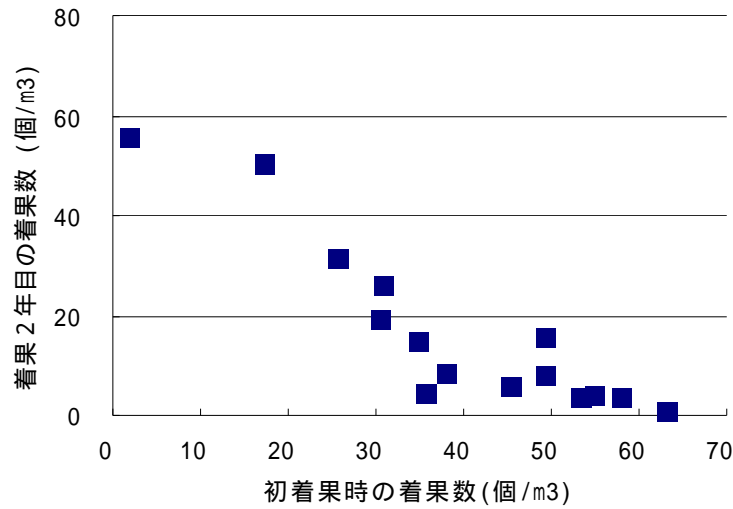


図1 初着果時の着果数が翌年の着果数に及ぼす影響
注) 初着果は2002年、樹齢6年生

表1 ヒリュウ台「白川」の初着果時の着果法の違いが次年度の着花(果)に及ぼす影響

初着果時の 着果法	初着果年			着果2年目			
	樹冠 容積	収量	m ³ 当たり 着果数	葉花比	樹冠 容積	収量	m ³ 当たり 着果数
	m ³	kg/樹	個/m ³		m ³	kg/樹	個/m ³
上部無着果	2.27	6.9	30.4	28.3	2.39	8.09	22.6
全面着果	2.16	7.0	29.5	35.2	2.79	6.15	15.9

注) 現地植栽ヒリュウ「白川」、初着果は2002年で樹齢4年生

表2 ヒリュウ台「白川」へのマルチ処理が果実品質に及ぼす効果(2003年)

処 理 区	着色	浮皮度	分析果	糖度	クエン酸
	歩合		平均重(g)	(Brix)	(%)
8月全面被覆マルチ	10.0	1.05a	132.6	14.0	1.13a
9月全面被覆マルチ	10.0	1.18ab	113.6	13.3a	1.11ab
9月樹冠下被覆マルチ	10.0	1.45bc	134.8	13.3a	1.05bc
露 地	10.0	1.72c	132.3	12.6	1.02c
有 意 性	-	-	-	-	-

注) 1. 現地植栽5年生樹
2. マルチは、タイベックで8月28日(8月区)、9月22日(9月区)から収穫時(12月3日)まで被覆
3. 浮皮度は、無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の平均値